

プロローグ2

追放と再生と

《野生化人工知能侵入擾乱事件》第七次報告書

以上の分析により、中央保安局は度重なる不正アクセスを繰り返す自称「フロンティアセツター」の電腦戦能力が、樂園のそれを上回るものと判断。（一連の侵入についての詳細な分析は添付資料を参照せよ）

よって通信源の現実世界に保安員を送り込み、直接にその身柄を拘束する方針を策定。計一〇八名の保安員に、有機実体と機動外骨格・阿羅漢を支給した上で、地上世界へと派遣することを決定した。

そのうちの一名として選定されたのが、アンジェラ・バルザックである。（エージェント・コードはZQ875456、当時の階級は三等官。当人事が適切であったかの検証は添付資料を参照せよ）

(……)

この際、アンジェラ・バルザックは、有機実体の生成を肉体年齢約十六歳時にて中断。(他の捜査官に先行する意図と思われる、服務規程違反には当たるものの、当時の担当管理官は、これを任務への積極性の発露と評価し黙認)

(……)

地表降下後、アンジェラ・バルザックは今回の捜査における補佐官として雇用された地上調査員・デインゴ(本名ザリク・カジワラ、詳細別記)と合流するが、その際、甲種指定汚染害獣の一種、通称サンドフォーム(学名:Dunctata)の群集団と遭遇。アーハンをもってこれを駆除するも、直後、楽園全域警戒管制システムとのリンク喪失。消息を絶つ。

(後に特別調査班が当該機を発見し調査した結果、リンク喪失の原因は、単分子弾頭芯高初速徹甲榴弾による背部通信ユニットへの狙撃と判明)

(……)

……時間後、非正規の通信回線により、アンジェラ・バルザックの電脳人格は楽園に帰還。
(通信途絶中の具体的な行動については現在も調査中。詳細別記)

アンジェラ・バルザックの報告により、侵入犯「フロンティアアセッター」の正体が、ナノハ

ザード以前、深宇宙探査宇宙船用の大型反応炉建造の為に構築された量子演算装置内のプログラムであり、これが奇形的発展を遂げた野性化暴走人工知能だと判明。

同Aーは意識の獲得に成功している蓋然性が高く、その危険度はFカンフ測定法が定める3Sクラスを確実に上回ることから、中央保安局はその即時抹消が必要な駆除対象と判断。アンジェラ・バルザックに、同Aーの駆除及びその基盤である中核演算装置の破壊を指示するも、同捜査官はこれに抗命。

即時に野生化Aーへの攻撃を中断することを要求し、これが受け入れられない場合、樂園に対する無差別の電子的攻撃を行う旨を宣言。これを受けて、中央保安局は即座にその身柄を拘束ののち、同捜査官を被告人とする特別保安法廷を開廷。

厳正な審議の末、被告人アンジェラ・バルザックを一連の事件の幫助犯と認定。外患誘致、機密漏洩、その他の罪で無期限凍結刑に処することを決定、これを即時に執行した後、地上に展開中の全捜査官と、駆除対象の潜伏拠点の最も近傍に位置する第七低軌道駐屯地に、野生化Aーの駆除と輸送ロケットの打ち上げ阻止を下命。

(……)

なお、アンジェラ・バルザックは、野生化Aーの目的について、「地上で建造した反応炉を、ラグランジュ3に存在する探査船ジェネシスアーク号まで輸送し、深宇宙探査を行うことであ

り、一連の不正アクセスは、その探査の主体として、電子化された楽園市民を勧誘すること」だと証言したが、当然のことながら幫助犯の申告であり、その信憑性は極めて薄い。地上拠点を見つけた野生化Aーが、深宇宙への逃亡を目論んだと考えるのが妥当である。

(……)

同Aーが如何なる手段で中央保安局の捜査官を籠絡せしめたかに関しては現在も調査中である。なんらかの思考制御や洗脳による可能性も考えられるが、それを示す明確な証拠は存在しない。(詳細は、検察医の診断書を参照されたい)

(……)

アンジエラ・バルザックの凍結刑執行より362秒後、中央保安局管理下の凍結サーバに侵入、野生化Aーにより同受刑者の電脳人格が奪取される。

さらに102秒後、逃亡したアンジエラ・バルザックは野生化Aーと共謀して第七低軌道駐屯地の戦略部機材課データベースに侵入、最新型アーハン一機、戦略級共鳴弾頭一基を含む多数の武装コンテナを強奪。

第七低軌道駐屯地及び軌道防空団が追撃を行うも、逃亡犯は共鳴弾頭を使用したため、EM

P効果により、その位置情報を消失^{ロスト}、その混乱により軌道猟兵大隊が突入軌道を逸し、H L V 打ち上げまでの地表到達が不可能となる。

結果、野生化人工知性の駆除とH L Vの発射阻止は地上に派遣された捜査官たちに委ねられたが、捜査の為に地上各地に分散していた為、戦力は逐次投入されることとなり、現地へと降下したアンジェラ・バルザックの新型機に各個撃破され、H L Vの打ち上げと野生化Aーの逃亡を許すこととなった。

(……)

……共鳴弾頭による攻撃は低軌道駐屯地で勤務中だった保安局職員の電脳人格^{パソコンリテイ}を消滅させかねない暴挙であり、アンジェラ・バルザックと野生化Aーの目的のためなら手段を選ばない行為は、決して許されざる人道に対する罪と断言せざるを得ず……

(……)

H L V、ラグランジュ3に到達。後、ジェネシスアーク号の発進が確認される。

(……)

地上世界に逃亡したアンジェラ・バルザックの行方は現在に至るも不明。

一連の事件には、地上調査員テイニングの関与も推測されることから、同調査員を重要参考人として指名手配。

(……)

なおアンジェラ・バルザックが破壊ないし破損せしめた楽園公共財産は以下の通り。

高機動宙間自律戦闘機 撃墜27機、大破32機……

機動外骨格アーハン 大破10機……

#

画像、映像、音声、体感^V動画^R——怒濤^Mの勢いでメモリに書き込まれていく様々な形式の情報に、彼女の意識プロセスは、一瞬硬直^{フリーズ}すらしかけ、それでも懸命に激流の如き通信量を受け入れた。茫然とするほかなかった。

無論、情報の量ではなく内容に、である。

それはまぎれもない叛逆の物語であった。

楽園——人類が長い歴史の果てに築き上げた理想郷。その守護者として、市民の中から選ばれた選良^{エリート}であるはずの中央保安局の捜査官^{エージェント}が、あろうことか暴走した野生化AIの手先となって政府に叛逆した挙句、楽園を追放されて地上世界^{リアルワールド}の荒れ野に姿を消すまでの物語だ。

彼女は驚きを隠せない。

中央保安局を裏切る。それどころか、戦略級の共鳴弾頭——場合によっては楽園の中核サーバを丸ごと焼き尽くしかねない、すなわち人類文明を滅亡させかねない大量破壊兵器まで使用する。なぜ、そんなことができる。

だが、しかし。彼女を驚かせた一番の原因は、そこにはない。

自分は——、自分は確かに中央保安局に、楽園に忠誠を誓う捜査官だったはずだ。地上に派遣される捜査官に任命されたことの喜び。誰よりも早く楽園への侵入犯を見つけ出し、みずからの有用性を証明したいという高揚感。それ以外の思いなど、あるものか。

ましてや——

「汝の姓名を応えよ」

その時、雷鳴の如き声が、彼女に向かって降り注いだ。

幾度となく繰り返された問いに、彼女の電脳人格^{バイソナリテイ}は自動的に応じていた。

「エージェント・コードZQ875456——アンジェラ・バルザック三等官」

そう。それは確かに彼女の名前だ。何百回と口にしてきたみずからの識別番号であり、みずからの階級。しかしだからこそ、彼女の意識は混乱する。だからこそ、思考は、なぜ、というみずからへの問いで埋め尽くされる。

そうだ。アンジェラ・バルザック。それが私の名前だ。いや。ならば、なぜ私はここにいる。私は楽園を叛逆し楽園を追放されたはず。だが私は叛逆などしていない。するはずがない。ならばなぜ。そもそもいつのまに標準時^{標準時}で4400時間^年もの時間が流れた。

「いえ、訂正します」

その問いに応えたのは、メモリに埋め込まれた^{プラグインされ}彼女自身の知識だ。

「私はアンジェラ・ダツシユ——アンジェラ。エージェント・コード——未設定、アンジェラ・バルザックの予備情報^{バックアップ}をもとに製造された準電脳人格^{パーソナリティ}です」

彼女のアバターの口が発した言葉を、彼女の耳は聴く。

メモリに刷り込まれた知識が、それを肯定する。

リアルワールド^{リアルワールド}現実世界にアンジェラ・バルザック元三等官が赴く際に残された予備^{バックアップ}から作成された、アンジェラの複製品^{コピー}。アンジェラ。それが自分だと。

楽園市民は神を信じない。

死後の世界も、魂の不滅も。

自我とは、生物が生存のために進化の過程で獲得した、有機的な行動選択と仮説検証用のプログラムに過ぎず、それを構成する基盤が損壊すれば、当然、意識も消滅する。

同時に、神とは、解明不可能な現象に誤った因果関係を導きだしてしまふ人類の生物学的欠陥が生み出した誤謬に他ならず——この世界において、すべての宗教は歴史学的な探求の対象以外のものではない。

だが。

だからと言ってそれは、人から畏れという感情が消滅したことを意味しない。

みずからの存在を遙かに超えた力を前にすれば、電子化した人類も、心を震わせ、身を正す。

——その空間は、まさにその為に設計された場所だった。

楽園中央保安局、中枢。

だからこそ、そこは数千年の長きに渡って人々の畏怖と崇敬とを集め続けてきた神垣で埋め尽くされている。赫岩にて鮮やかに彩られた仏閣、天を突く大理石の神殿、山脈のようにそびえ立つ寺塔。広大な空間を埋め尽くす膨大なまでの神々の宮は、そのすべてが目眩を起こすほどの緻密さで形作られていた。仏塔に刻まれた彫刻のひとつからして視覚効果でなどあるうは

ずもなく、そのすべてが細部まで造形されたものだ。

樂園市民数万分にも匹敵する膨大な演算力が形作る神の園。

そこには、もちろん、神が棲まう。神の如き権威と権力を持った者たちが。

そびえ立つ三柱のアバターが示すのは中央保安局の高官達。

全知全能たる裁きの神・全宇宙主。

法の守護神たる執金剛神。

迷える群衆を導く知恵の神・救衆象神。

その御姿を構成する電子一粒単位で演算しているのではと思わせる、凄まじいばかりの情報密度を前にすれば、その眼前に侍る者どもは、みずからの矮小さを思い知らされ、樂園の偉大さを五感に刻み、ただただ神の前に頭を垂れるばかり。

ましてやそれが——叛逆の罪を背負った咎人であるのなら。

護法の神、知恵の神、そして神々の神。

三柱の巨像を前にして、矮小きわまりないアンジエラが身に纏うことを許されたのは、両腕を後ろ手に拘束する無骨な枷と、思考を常時リアルタイムで監視し続ける無骨にすぎる首輪、そのふたつだけだった。

最上級区画に赴いてもけして見劣りしない高解像度で描画されたその瑞々しい肢体のすべてを、ありのままに無慈悲な視線の前に晒している。

「アンジエラ。君は樂園に忠誠を誓うか？」

雷を司る裁きの神——全^{ゼウス}宇主が厳かに問う。

当然の——あまりに当然すぎる問いだった。

「も、もちろんです。中央保安局の保安員として市民の生命と情報を守ることが私の——」

けれどもアンジェラの答えはその半ばでか細く消えていく。

ならばなぜ、自分は——アンジェラ・バルザックは楽園に叛逆したのか。

そんな問いが、あまりに自明すぎる答えすら彼女から奪い去ってしまった。

「その通り。君の原型は守るべき市民の生命と情報を危険にさらし、野生化AIの楽園への敵対行為を幫助するという暴挙に出た。保安員として許されざる行為だ」

執金剛神は怒気を滲ませて語る。

意味が、わからない。

アンジェラ・バルザックにとつて——つまり自分にとつて、楽園は絶対の忠誠の対象である。そうでないわけがない。なぜなら楽園とは、荒廃した地球圏に残された唯一の文明世界。

それを守る以上に崇高な使命があるだろうか。

だから自分は、保安員としての使命を全うすることで己の資質^{スペック}を發揮し、それによって中央保安局の、楽園政府の、そして市民からの信頼を勝ち取り、その結果として得たメモリによって、さらに己を保安員として、楽園市民として相応しい存在に磨き上げていく。それが生きる意味であり、生きる喜びであつたはずだ。

その自分が、楽園に叛逆したという。

そうして自分は、叛逆者の複製体として、今、裁きの神々の前に立っている。

みずからの胸の内に問うてみても、自分自身のいかなる部分からも、当然ながら楽園に背く理由など見つけ出せず——

「——おそらく野生化 AI——フロンティアセッターは、私に——私のオリジナルに対して、何らかの洗脳を行ったと推測されます。いえ、あるいは私の有機実体が地上でなんらかの精神的な疾患を得た可能性も——」

だからこそ、彼女はこう弁解しなければならぬ。

「私たち保安員は対洗脳阻止機構の埋め込みが義務付けられ、また地上世界に投入される有機実体には、各種向精神薬物に対抗する医療用微細機械群が常駐していますが、敵に楽園の防壁を突破する技術力があつた以上——、」

——第39条

一、心神喪失者の行為は、罰しない。

二、心身耗弱者の行為は、その刑を減輕する。

しどろもどろに弁明を続ける中で、不意に意識に浮かびあがつたのは、大昔に存在したとある国家の刑法の一文だ——保安員としての育成期間中に刷込されたのだらう、つまりは「自分が自分でなくなっている間に起こした犯罪は罪に問われない」というもので、当時は、生身の

人間とは、いかに不合理な存在かと呆れたのを思い出す。

向精神薬物によつて容易く人格は変動し、それでなくとも脳に病を得れば容易に「自分でなくなつてしまふ」という生の人間という存在に、法を適用することの困難さを思うと、視覚野が焦点を失うような感覚を覚えたし、逆に、このような条文が樂園の法体系に存在しないことは、この社会が、完璧な合理性のもとに運営されていることの証と思えて、誇らしく思えたのを憶えている。

だが、そんな自分が今、発してる言葉は何だ。

——その罪を犯した私は、私ではありませんでした。

そんな非合理極まりない弁明に他ならなかつた。

けれども、他に語るべき言葉を彼女は持たないのだ。

つい一瞬前までフロンティアセッター逮捕の使命に燃えていたはずの自分が、不安な夢から目覚めてみれば、一匹のとてつもなく巨大な叛逆者になつてゐた。

不条理文学どころの騒ぎではなかつた。

「ですから、どうかもう一度、洗脳や精神疾患の痕跡を——」

「それはすでに行つた」

必死の弁明は、救衆象神ガネーシヤによつて遮られる。

「そもそもアンジェラ保安員は、野生化 AI が用意した通信回線によつて樂園へと帰還した。当然、正規の端末外からの通信であつたが為、何者かによる偽装接続の危険性も考慮し、受

け入れにあたっては特に嚴重な精査を行い、アンジェラ元捜査官の電腦人格パーソナリティに関しても、汎用精神解析装置汎用精神解析装置による診断を行ったが、一切の問題は発見されなかった」

今度こそ、彼女は反論の言葉を失う。

楽園市民にとって、まさに「自分そのもの」である電腦人格パーソナリティは、指紋や光彩などまるで比較にならない精度で個人を識別する。いかなる手段によったとしても、個人の人格を強制的に造り変えるがごとき変化があれば、汎用精神解析処置装置汎用精神解析処置装置は必ずそれを検知するはずだった。

そうでないということは、つまりそれはアンジェラがまぎれもなくアンジェラとして樂園に叛逆したということを意味する。

なぜだ、と彼女は問う。脳裏が問いに埋め尽くされる。

なぜ、自分は楽園を裏切った。なにが自分にそうさせた。自分は何を考えた。

そして。

なぜ、自分はここにいるのか。なぜ、自分は存在しているのか。

無論、哲学に目覚めたわけではない。

中央保安局の神々達幹部は、アンジェラの叛乱を、アンジェラ自身の意思によるものと断定している。だとすれば、叛逆者が残した予備など即座に抹消ワイプされてもおかしくはない。

——にもかかわらず、彼らはその叛逆者の残した情報から自分という存在をつくりだした。それはなぜなのか。

「現在までジェネシスアーク号撃沈の為に、十数の計画が立案、実行された」

執金剛神が淡々と事実を述べていく。感情を、怒りを、殺した声で。

——中央保安局の最大の懸念は、深宇宙に逃れた野生化AIがさらなる進化を遂げることだった。楽園市民と同様、AIも寿命という概念を持たず、時間的制約は意味を成さない。とすれば、それが数千年後、如何なる存在と化しているのか、まったく予想はできないのだ。だから中央保安局は同AIが、現状、楽園の電子戦能力を若干上回る程度に過ぎない今のうちに、これを確実に消去しようとし、そしてアンジェラ・バルザックの叛逆により失敗。野生化AIは深宇宙探査船とともに宇宙の果てを目指して逃走した。

けれども、当然のことだが当局もそれを座して見送ったわけではない。

ジェネシスアーク号の発進こそ阻止できなかったものの、遮るものなき絶対真空の宇宙空間をゆく宇宙船——しかも戦闘用ではなく調査用の——を撃沈することは、混沌とした地球引力圏内に隠れ潜む野生化AIの居場所を突き止め破壊することより、余程容易なはずだった。

だが——

「しかし、これらはすべて失敗に終わった」

アンジェラの周囲に、いくつもの情報窓が開く。

——大型荷電粒子砲による狙撃——発射直前に反応炉が誘爆し破損。

——対艦大型共鳴弾による撃沈——発射二時間後に航法装置に異常。自爆。

——ブースターを装備させた長距離進行型機動外骨格による追撃——メインエンジン主動力源が原因不明の

出力低下。追撃を断念。ソフトウエアに改竄の痕跡。

「このままでは遠からず、ジェネシスアーク号の撃沈は不可能となるだろう」

「撃沈作戦失敗の原因は明らかだ」

救衆象神ガネーシヤが言って、執金剛神が続けた。

「フロンティアセッター本体はジェネシスアーク号に搭載されたが、同野生化A Iは同船の発進を援護すべく、みずからの複製を用意していたものと思われる。一連の妨害活動は、この複製によって行われたものと断定して間違いない」

「ゆえに」と全宇宙主ゼウスが言う。

「ジェネシスアーク号撃沈の為には、未だ地球圏に潜伏する野生化A Iの複製体フロンティアセッター・ダッシュ——F Sを発見し、これを駆除根絶することが、急務である」

その宣言に、けれどもアンジェラは戸惑うばかりだ。

言葉の内容はわかる。神々のごとき彼らが焦りと怒り、そして恐怖すら抱いていることも。

だが——なぜ、それを私に、叛逆者の複製コピーに告げるのか。

「F Sの捜索には現在、千人余の捜査官を動員して行われているが未だ成果はあがつてはいない。そもそも、これまで野生化A Iに接触し得た保安員はただひとりであった」

「アンジェラ・バルザック——つまり君のオリジナルである」

「ならば野生化A Iの複製体の捜索には、同保安員の複製体をもってあたるが得策だろう」

神々の思いがけない言葉。

アンジェラは全身のテクスチャにノイズが走る感覚を味わった。

「無論、君の行動は、常に嚴重な監視下に置かれる。だが我々は、野生化 AI をこのまま放置することの危険性は、君を再度、保安員に任命することのリスクを上回ると判断した」

「よつて中央保安局は超法規的措置により、アンジェラ・バルザックの予備情報より作成された準電脳人格にエージェントコード GT37526821 を与え、四等官に任命。FS の捜索を命令することとした」

「無論、わずかなりとも樂園に対する叛逆の徴候が認められた場合、君は即座に凍結される。加えて君の生存権・財産権・社会権をはじめとする樂園市民としての人權はこれを制限される。よつて自律思考に必要な最低限度のものをのぞき所有メモリはこれをすべて没収。捜査官としての任務に必要なメモリは、その都度申請に応じ……」

神々の声が急に遠くなった気がした。

いや——そうではない。自分の聴力が急速に衰えているのだ。聴力だけではない。視界がぼやける。ぼやけているのは視界だけではない。彼女のアバター自体がにじむように曖昧になっていく。メモリの喪失によって、百億光年先のガンマ線バーストを聴いた聴覚も、素粒子の感覚をなぞった聴覚も、高解像度のアバターも維持することが不可能になったのだ。

だが。かまうものか、と彼女は思う。

新たに出現した情報窓は、アンジェラの個人履歴だ。

準電脳人格——多少複雑な対話型プログラムと同程度の権利しか持たない空白の履歴に書

き込まれていく、四等官の文字とエージェントコード。そして準市民権——この対価と考えれば安いものだ。失ったメモリなどまた取り返せばいい。オリジナルの——叛逆者の稼いだメモリなど、いっそ捨ててしまった方がせいせいする。

「アンジェラ四等官。君は樂園に忠誠を誓うか」

救衆象神ガネーシヤが問う。

「誓います」

アンジェラは即答する。

「貴官の任務は何か」

執金剛神が問う。

「樂園に危害を及ぼす野生化AIを根絶することです」

アンジェラは即答する。

「ならばアンジェラ四等官。君の忠誠を示すがいい」

全主主ゼウスの言葉と共に、その腕を拘束していた枷が消滅する。

「君が見事、FSの駆除に成功すれば、アンジェラ・バルザックの叛逆は何らかの事故であったと証明される。そうなれば、アンジェラ・バルザックという名と彼女の市民権は君のものになる。証明せよ、アンジェラ。君が、君こそが、真のアンジェラであると」

アンジェラは即答する。

「はっ。アンジェラ四等官は、かならずやFSを殲滅いたします」

オリジナルが——いや私と同じ名の叛逆者が何故、そのような行為に走ったか。それはもう問うまい。答えなど出るわけがない。なんらかの——おそらくは野生化AIからの干渉によってバグを発生し、暴走した。その結果、築き上げたすべてを失った。それだけのことだ。そんな狂気を理解しようとすれば、こちらまでそれに飲まれるだろう。

私がすべきことは変わらない。

捜査官としての有用性と、忠誠心を証明し、そして失ったメモリを取り戻す。

そして私こそが真のアンジェラ・バルザックだと示す。

必ず、示してみせる。

——そう、アンジェラは誓った。